

西洋道中膝栗毛

八編上

11
1260
15



134
1260
15

萬國航海

西洋道中膝栗毛

東京書肆
萬笈閣壽梓

假名垣魯文著
一萬齋芳幾画
八編



西洋道中膝栗毛第八編序

蟬者無口而啼魚者無耳而聽

靜魯文先醒者不出假名垣裡而

能達萬國情態筆頭奔為壹銖增

人力車猶遲腹橐不盡如出帆蒸

氣煙更不追先哲後馬新関滑稽

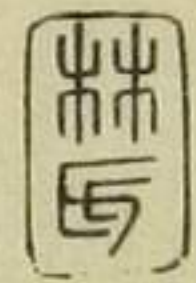
西洋道中



外人可為抱腹絕倒嗚呼此才也
グライシシモベシスハウフクゼツタワアコソサイヤ
 不可得學而勉不能唯所使天然
ズベカラウマナビ。ツトメテズアタハ。タ。トコロシムル。エシシカラ
 而此人在乎。
コソヒトアルカ。

明治四稔辛未秋柒月中浣
シチクハツチウクニ

魁園庸史題冰狐堂
クワイエンヨウシタイスヒョウコダウ



於屋後寓居

卓筆之寫



太婆家

以

初

林の屋

炭薪齋

表

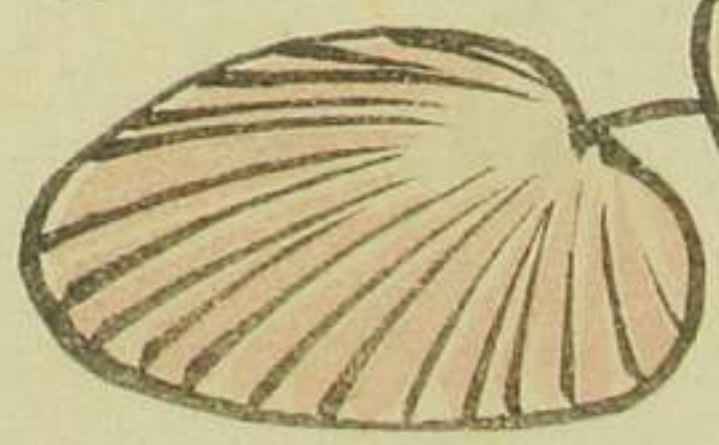
訪假名垣先生不遇
掲壁上美人圖戲作

平久在齋室有柿

之飄然為房角老幼笑

長獨坐好客歷以家免卷

陸中水澤 外牛教人頌



小澤

凡例附言

○拙著の膝栗毛僥倖小時好よかるひて發行每部
 千以下らむと梓客の耳たぶ作者のまこれ當り喝采
 々々と讃まをべし是乍而標目よよる所敢て作者
 の切小あしむとせん

○每部發兌を促まこと急るぬ故校合の手を待む
 製本まをること神速なり故に傍訓の方言よこが
 とりのせしとさし寫しげして字義を其儘読ま

さるる各戲作の本意は違ひて遺憾少く横
訛りの朴訥なるい余が革の得意とする所へ

○俗間横濱語と号へ「あゝ」あゝやう」「い」「い」
さん「よろい」「まらり」あどりるとい洋人と贈答
の階梯として内外必用の語をれば本文中專に
用ひたり甘口あること推して知るべし

作者 假名垣魯文迹記



西洋道中膝栗毛八編上

東京 假名垣魯文戯著

夢番を撰文を以て書三世帝の仁園屋の主人近
江身代の昌んまやせ衣服は金銀珠玉を飾り食
料は牛乳の舎席を味ひ春の前裁の花は裁れ
装の後園の水は浴び終日終夜新妓幫同を法
どく総貫の藝を拂ひ酒色は弱き家政を
えくくもと自惚増長し慢心高上て交際者玉を

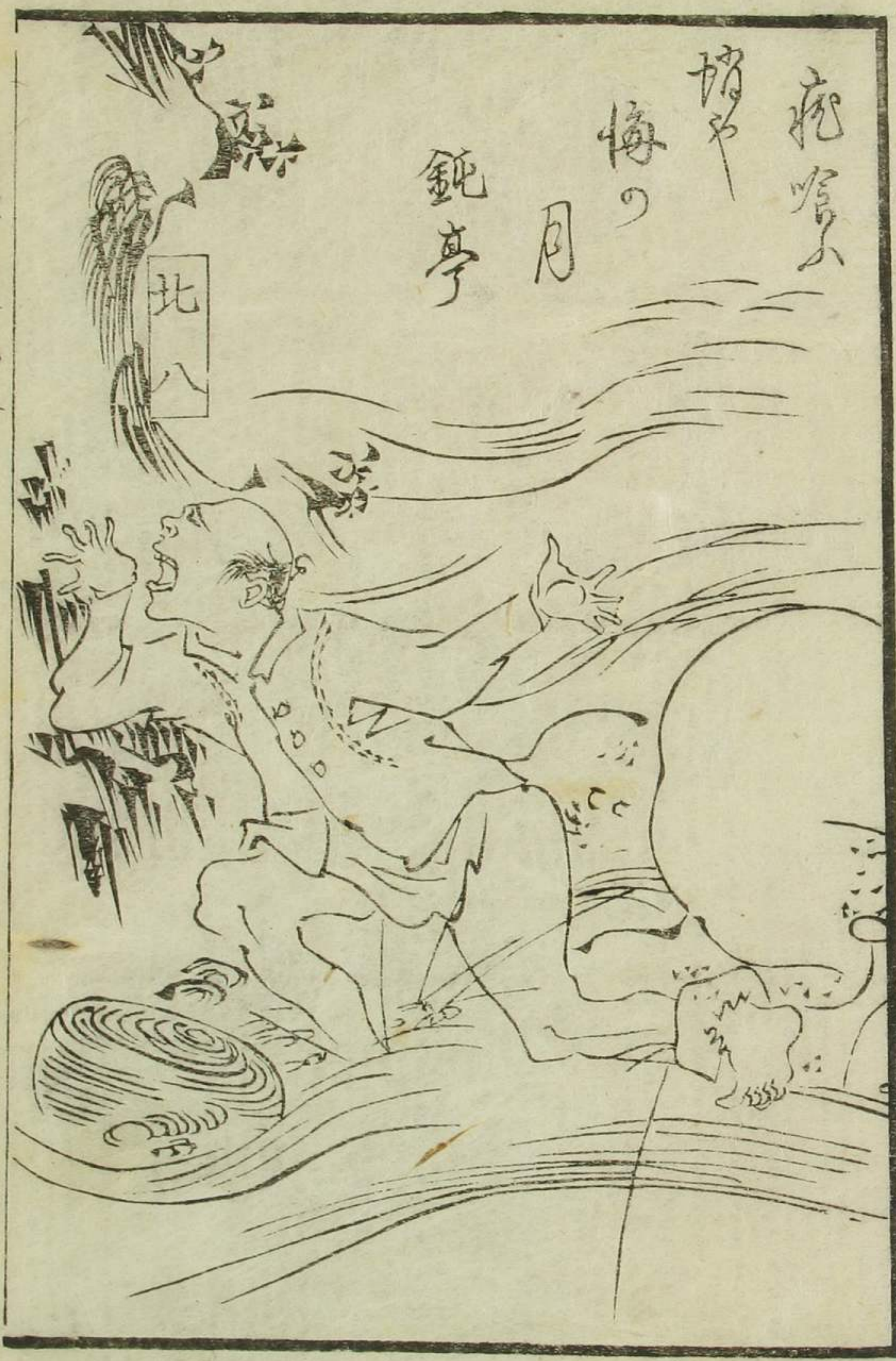
命いのちからぐみめよありーんぜおホニニヨとおとくらの
 友とも達だちは外ぐわい虫ちゅうのやうらとと同どう意いくくく沸あ湯ゆを吞のせ
 やうみここをまのやアあけち方かたもも以も後ごもものろろ者もので付つき
 合あうららそそううおおつつくくンんああせせ人ひとををももああろろくくももぬぬひひと
 ををつつけけははししタタトああららぶぶののごごちちののここののささんんべべーーいいののらら
とおおせせがが海かい流りゅう船せんののああるるをを免めんくくいいののらら
 面めんのの皮かわ々々ああめめ人ひとたたららがが他たははううままののままををむむづづははををままくく
 ああぐぐららササツツくくーーととおおままだだててままままツツくく海かいよよととぐぐままいい
 ううツツくく他たををううららむむみみアアららららぬぬああららららととモモテテル

おおたたぐぐままいいくくああらら夜よ夜や夜や夜やひひツツををううららととんんででけけいい
 物ものよよ引ひききううららままいいくく四しドドルルああんんぐぐらられれらられれららかか
 めめ人ひと達たちののんん人ひとののんん配はいくく夜よ中ちゆうおおたたぐぐ線せんはは
 出でててううらら系けい神しんけけいいツツくくううららままれれちちわわアアららままららぬぬ人ひと
 通とララツツととれれもも作さく院いんののたたひひごごととおおややアア後ごももたたぐぐぬぬ
 一いトトキキニニククのの運うん送そうぶぶああんんぞぞあありりききままああととびびいい
 ああるるめめ人ひとううららああんんははししららぶぶららおおああつつひひ土つち境かたをを
 愛あいののららちちのの車くるまははああつつててもも性せい来らいいいががううせせ人ひとああんんぎぎ

だが昨きの一いち寸すんとてきたところであつたやま 糸いとあんざく
 おおああよよササけけととままとのとの瀬せ辺へはは島しまのの傍かたはらににああつつたたりりがが波なみ子この
 中なかににああつつたたりりととおおつつたたりりのの中なかににああつつたたりりとと
 ぐぐふふ小こ魚いさなああんんどどがが遠とほくくににああつつたたりりとと十二じふに時ときににああつつたたりり
 海うみ鳥とりああんんどどののむむららににああつつたたりりとと糸いとあんざく
 附つああややアアそそんんににああつつたたりりとと外ほかはは糸いとあんざく
 一いちととああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 波なみ子こががああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 波なみ子こががああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと

深ふかいいににああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 北きたののああんんののああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 水みづ際ぎはににああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 それそれととああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 のの地ちををああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 ととああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと
 出でるるののああつつたたりりととああつつたたりりととああつつたたりりとと

西洋果三入二



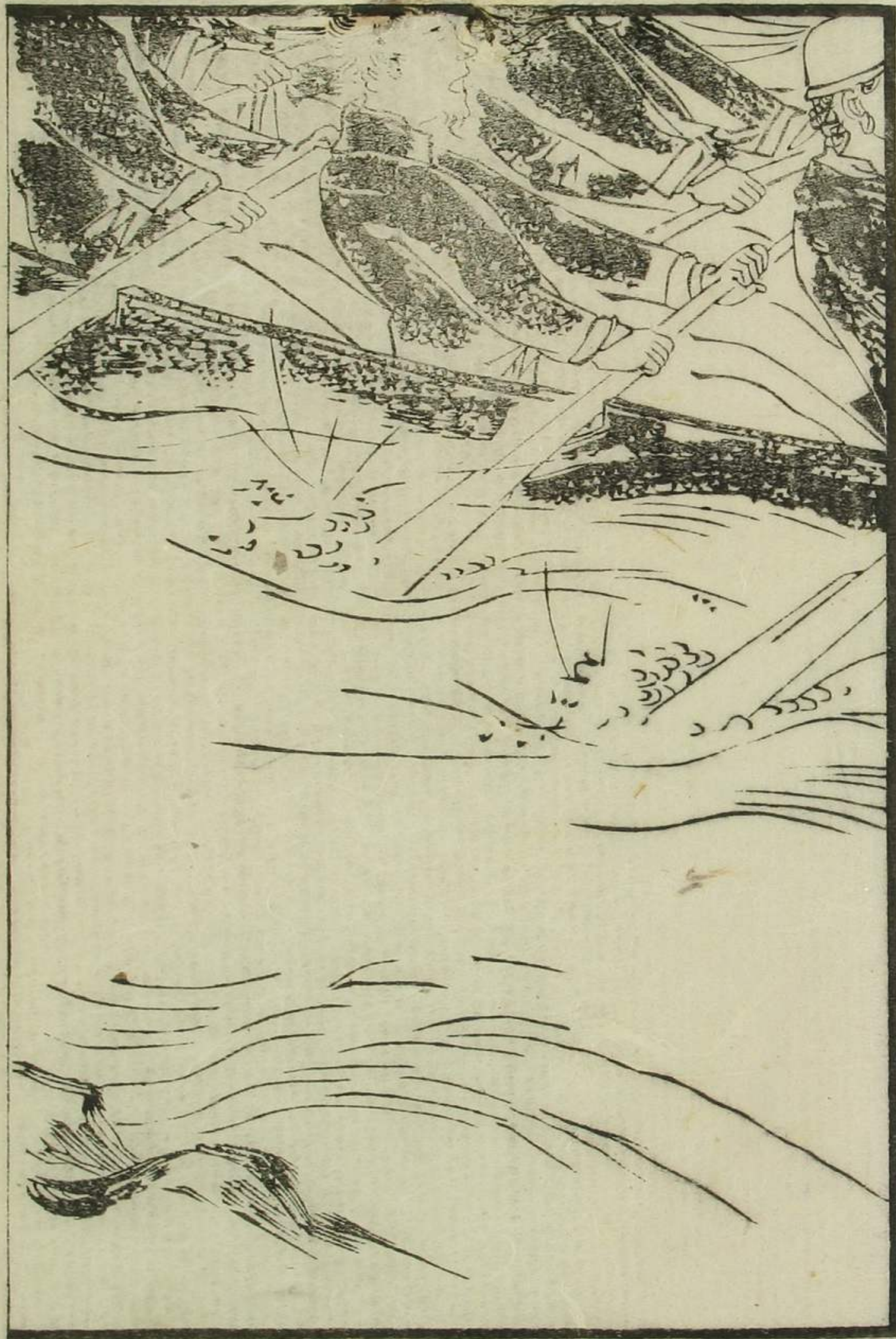
西洋果三入二

いつまでもおられ後へ今も大なるうらやませりや
 友人あつらひ持つてけりまて純宮の門妻あても役い
 みるだらう北純宮の門妻あつて暇さぬみても見際
 らまるといふゆゑを承るゝあるけきど地獄の門妻の
 小役があつてりそらだ足 糸うさアぬ後寛徳都の
 一日驚りておれそらだ北むふよ船へ入くるけきど
 暇たつてもおれを春で後ぐらふら大勢ぐらやア
 志ねへ糸あつてもけ洞よりうらやアおられぬ

こゝろをそらくてよぶべし
 てあをまぢり布さじのまをどろを 糸入
 みるでくありけしと糸のりよケ 糸入
 ヤア~~~~イ引 糸入をうぎう ○糸入又通次郎の傍に
 のころあるゆゑ茶屋お後らつてけり糸入ハ友人
 の衣裾を衛り糸入除の「ラム子」お咽を涙じ糸入を
 らく村を松じ彼那那の緒亭お似たりける糸入の
 茶亭おみ十年の糸入がうらやま達波の糸入むつら
 起る時計を糸入いつて時計の糸入をみるより

乞とれふその身も糸継く彼妙ふ玉もぐ葉もたぐ
 のぞ縁は席と小八あるあぞる付小舟よりちのせとく
 運上所まぐ構りごとをせも知あてぬ人をひたとり
 此茶の茶店小運帰る小縁は席北八の藤生たる
 小舟へもまざめたる面ををるわしめんがくむげ小
 矢窓まかまぐ一縁イヤち名通さんといとてとて由ん
 配まぐけやして北へ徹よめんがく玉をまぐつばしとけ
 サだぐ子これわやア妙る新波ぐありやまぜせ通コレサ

コンサそれだぐら愛初らわぬことまやアぬ人らぐら
 む泉水へもぬつてせ人流よ隣りの朝のやうふ服を
 白黒くくさくさくあめんがくが大海つきのこの境
 辺へ流す鴉の體へあひつらぐららまやアぬ人ら
 あんまぐ波のこのもあたらぬ人ら深入まきあひのびヨ
 縁へそまふとひもあつぬ小怪有あつサイヤをち十方
 もねめあふぐらつしとまぐまぐあひがくことあるとらら
 サト
 西洋果毛ノ...



西洋船

八



西洋船

十五

弥次郎

北八

一萬高
幾許

竺仙

橋小登

舟

舟

舟

のも彼婿ゆゑダ通鳥械さぬと受て入れ
 と婿壺のへあんべいのふ事固らゝいのウ孫はさん
 孫あんのか婿壺どころろささいのつちの味もあめ
 一北コウク一強勢かあまをかるゝめる、婿やささいが
 歯は合ねへ佐志やア今交離縁あゝ女房をこれ
 ちで食とあされるものゝ現在のか樹のこれがさやん
 だ通コヤおさんの妻若ハ婿おさいを合婚して婿
 婿の南をありたつて亭主お吸つさむせり子北一尻

それ志やア婿の解ゆうが悪イ悪魚の鱗石鱗と
 りみことヨ孫ア〜〜〜の近江附會の大お床がサ
 テおれもらん附會を吐おとさうろ子トおらびを
 吸付くもるまぬ縁の糸目より
 切るふきつられぬたらのらる是
 北返あはまあはちかくあんよめる
 花あふあ〜〜逆む是のぬけうねて
 赤い流れの身とぞなうりける

跡ハ知ヒをのまゝて目も西洋小傾けびと人ぞく
當店を立お旅者をさうて立帰りぬ

作者附云文友樂浪子の印交記行を一見
せしに乍夜海中或ハ紅海の小島小章魚
の種類ありその形本邦の鱒小等けれど身
あり背脊りて画ける為天物の如く偶巨大
あり何りて人をとり小舟を覆ふありとある

西洋道中膝栗毛八編上

